TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN

東北芸術工科大学

技官（木工技術職員）
お仕事紹介資料

01

木工経験が活きる　セカンドキャリア歓迎　技術サポート職

TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

木工の技術を、次の世代へ。

その手で積み重ねてきた木工の経験が、学生の“ものづくり”を支えます。

大学の仕事といっても、お願いしたいのは講義や研究ではありません。
実習棟（工房）の安全管理、機械のメンテナンス、学生への技術アドバイスを担う、現場に近い技術職です。

教員ではありません。木工の現場を支える技術職です。

この仕事のやりがい

若い世代に技術を手渡せる

加工の段取り、刃物の扱い、安全の勘どころ。現場で培った知恵が、そのまま学生の学びになります。

“つくる場”そのものを守れる

機械が安全に動き、実習が気持ちよく進む環境を整えること自体が、大切な仕事です。

作品づくりの裏方として誇れる

家具や木工の制作が形になるまでを、技術面から支える。学生の成長が近くで見える仕事です。

セカンドキャリアにもなじみやすい

“現場一筋”でやってきた方ほど力を発揮しやすい、落ち着いた判断と経験が活きる職種です。

この仕事の中心

- 工房の安全管理
- 木工機械や周辺設備のメンテナンス
- 学生の制作時の技術サポート
- 教員と連携した実習環境づくり

若い世代に技術を伝えたい方へ。
「まだ自分の腕は役に立つ」――そう感じている方に、ぜひ知っていただきたい仕事です。

こんな方を想定しています

家具メーカー、木工所、工務店などで木工加工の実務経験が3年以上ある方を主な対象に想定しています。

（募集要項では、**プロダクトデザイン学科の教育内容を理解し、材料加工の知識と技能を有する方**、そして**木工の実務経験3年以上が望ましい**としておりました。）

たとえば――

- **家具製作・木地加工・組立の経験がある**
- **工房内の安全管理や段取りに慣れている**
- **機械の点検・刃物交換・日常整備の経験がある**
- **後輩指導や現場での助言をしてきた**

大学だからといって、教員免許や研究業績は必要ありません。重視したいのは、**木工の現場で身につけた経験、安全意識、そして人に伝えようとする姿勢**です。



※「新実習棟（プロダクトデザイン）」木工室全景写。

本学の木工実習設備・環境

東北芸術工科大学の新実習棟には、家具づくりに関わる実践的な設備が集約されています。新実習棟A 1F には「家具・木工室」「塗装室」「総合加工室」があり、素材加工から成形、仕上げまでを一連で行える制作環境が整っています。

高周波プレス機

成形合板のプレス機。薄いシート状の木素材と専用接着剤を重ね、木型の間にはさみ、圧力・電気・熱で圧着して、椅子などの曲線的なフォルムをつくります。

金属製大型スチーマー

木を蒸して加工しやすくする、曲げ木用の機械。木材の繊維や含水状態を見ながら扱う経験が、制作の安全性と仕上がりに直結します。

倣い旋盤

木製家具のほぞ加工や、角材を円柱に切削するための機械。手順の理解と刃物・材料への目配りが求められる、木工の基礎力が出る設備です。

真空成型機

石膏型と加熱した樹脂シートで立体形状をつくる機械。木工だけでなく、異素材をまたぐ制作にも学生が触れる環境です。

この実習棟は、単純な作業室ではなく、家具制作・成形合板・曲げ木・塗装・総合加工まで視野に入れた実践的な制作環境です。設備が単体で並ぶのではなく、工程としてつながっている点に特色があります。

設備から見える学び

- 曲線的な形を生み出す成形合板の加工
- 木を蒸して曲げる曲木の実践
- 木工と異素材をまたぐ立体制作
- 仕上げ工程まで見通した制作フロー

技官が支えるポイント

機械の状態確認、刃物や治具の扱い、安全な作業順序の判断、材料や加工方法への助言。こうした日常的な支えが、学生の制作の質と安全を下支えします。





※ 設備環境の先にある成果イメージとして、東北芸術工科大学 卒業／修了研究・制作展に展示された学生の作品。

技官の1日のスケジュール例

以下は、実習対応がある日の**一例**です。授業日程や時期によって変動はありますが、**出勤から退勤まで**、実習棟の安全と制作環境を整える流れが基本になります。

9:45　出勤・開室後の状況確認

出勤後、家具・木工室や周辺室の状態を確認し、通路の安全、機械周りの整理、前日の残材や工具の置き方などを見て、学生が安全に入れる状態を整えます。

10:00〜11:30　機械点検・授業準備・実習前対応

使用予定の機械の作動確認、刃物や消耗品の確認、必要な備品の準備を実施。授業内容に応じて、教員と作業導線や注意点をすり合わせる場面もあります。

11:30〜13:00　学生の制作サポート

加工相談、刃物や治具の使い方の助言、安全確認、材料の見立てなどをサポート。「この加工なら順番を変えた方が安全」といった現場目線の一言が活きます。

13:00〜14:00　昼休み

午前中の実習の様子を振り返りながら、午後に備えてひと息。学生の動きが多い時期ほど、こうした区切りが大切です。

14:00〜16:30　実習対応・作業環境サポート

午後の実習に立ち会い、加工中の危険がないか確認。教員と連携しながら、学生が集中して制作できるよう、設備・作業環境の面から支えます。

16:30〜17:45　機械メンテナンス・片付け・材料確認

使用後の機械の清掃、簡易点検、消耗具合の確認、作業場の整頓、材料や備品の在庫確認を行い、次に使う人が安全に使える状態へ戻します。

17:45〜18:45　翌日の準備・閉所確認・退勤

翌日の授業や制作に向けた準備を行い、火気・電源・戸締まりなどを確認して閉所。18:45を目安に退勤する流れです。

※勤務時間は時期により、原則8時45分〜17時45分(休憩60分)または、9時45分〜18時45分（休憩60分）のいずれかになります。

働き方のイメージ

基本に1日の流れが見えやすく、生活リズムを整えやすい印象のある業務です。とくに「極端に早朝の勤務や夜遅くまでの現場は控えたい」という方には、安心材料になりやすい仕事です。

補足

上記はあくまで一例です。授業日程、制作の繁忙期、学内行事等によって動きは変わります。詳しい勤務条件は募集要項をご確認ください。

“いつもの現場”とは違うやりがい

前に出て目立つ仕事ではありませんが、毎日きちんと場を整え、学生の挑戦を支える。その積み重ねが、大学のものづくりを底から支えています。

よくある質問

Q. 教員免許は必要ですか？

A. 不要です。今回の募集は、講義を担当する「教員」ではなく、実習棟を支える**技術サポート職（職人枠）**です。学生に一から授業をするというより、制作時の安全管理や技術面の助言を行う役割です。

Q. 学術研究の経験は必要ですか？

A. 不要です。重視されるのは、木工の現場で培った経験、安全への意識、機械や材料に対する理解です。研究実績よりも、現場での判断力や段取り力が活きる仕事です。

Q. 年齢が気になります。

A. 年齢そのものより、**経験・落ち着いた判断・安全管理の力**が活きる仕事です。若い学生にとって、長く現場を見てきた方の言葉には重みがあります。セカンドキャリアとして考えやすい職種です。

Q. 家具メーカーや工務店での経験は活かせますか？

A. 大いに活かせます。家具製作、木工加工、組立、塗装前後の段取り、工房内の安全管理、機械のメンテナンス経験などは、そのまま実習環境の支えになります。

Q. ブランクがあっても大丈夫ですか？

A. ブランクがあっても、メンテナンス・安全確認・加工の勘どころは大切な力です。まずは「現場を見る目」があることが強みになります。大学という場で、無理なく経験を活かしたい方にも向いています。

木工の技術は、道具や機械だけでは伝わりません。“どう見るか”“どこで止めるか”“どう整えるか”――その感覚を次の世代へ渡してくださる方を、私たちは求めています。 教員ではなく、現場を支える技術職として。あなたの経験を、芸工大の実習棟で活かしてみませんか。

応募前に見ておきたい視点

この仕事は、木工を一方的に教える役割ではなく、危険を先回りして減らし、学生が安心して挑戦できる場を整える役割です。現場の落ち着いた判断が、そのまま価値になります。

現場経験が活きる場面

材料の癖を見ること、機械音の違和感に気づくこと、無理な加工を止めること。そうした経験者ならではの感覚が、日々の実習環境を支える力になります。

木工室で使用している機材

技官が日常的に関わる設備

以下は、新実習棟にある木工系設備です。技官は、こうした設備の安全確認、使用前後の状態把握、学生への使い方の助言を通じて、制作環境を支えます。



高周波プレス機

成形合板の制作に用いられる代表的な設備。曲線的なフォルムを生み出す工程を支える。



金属製大型スチーマー

木を蒸して加工しやすくし、曲げ木の制作へつなげる設備。家具制作の実習環境を象徴する一台。



倣い旋盤

家具部材の加工に使われる木工機械。学生が加工精度や素材の扱いを学ぶ実習にも関わる設備。



真空成型機

型に沿って樹脂シートを成形する機械。木工系設備とあわせ、幅広い立体制作を支える機材。

伝えたいこと

大切なのは、さまざまな機械を並べることだけではありません。それぞれの設備が安全に使われ、学生の作品制作へつながるよう、技官が日々の確認・助言・整備を担っていることこそ、この仕事の核です。